

今そして未来

県環境アドバイザーからの提言

▶▶18

海の水が蒸発して雲になり、雨や雪となって降り注いだ水が陸上を流れる場所が川で、川は陸と海をつなぐ回廊であり、地球上における水の大循環の経路でもある。

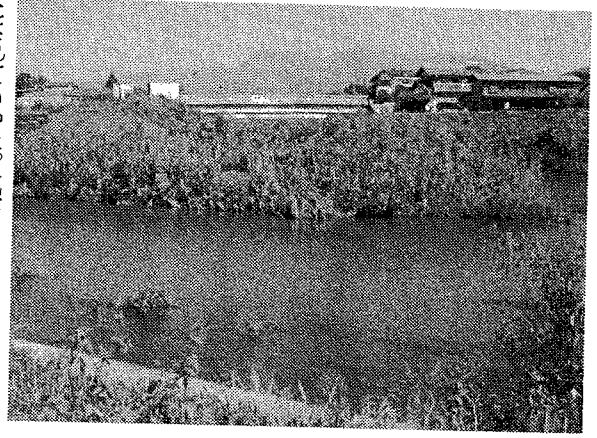
「水は三尺流れれば清くなる」といわれる。水の浄化能力を表した古き良き言葉だろう。古来、日本人は自然現象や自然物を恐れ敬いあがめてきた。かつては、川を汚すと罰が当たると親に言われながら育ててきた。だから、よほどのことがない限り、川の水の持つ許容範囲を越えるような汚濁物質(負荷)を流し込むことはしなかった。

川の水は水田稲作に

川は陸と海をつなぐ回廊

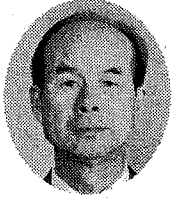
とってなくてはならぬものだったが、時代が変わり生活が豊かになると、食料なども輸入するようになって水田が減り、用水路の整備が進み川の直接的な利用価値が低下した。河川工事で川が直線的となり、高い堤防の造成と防護柵の設置で人と川が隔てられていった。それとともに川には水の浄化能力をはるかに超えた汚濁物質が流入し、ごみの捨て場

とされていった。気が付いたらどぶ川になって魚なども住めない汚濁水路になり、汚いから川に入ってはけないと親から言われて子供が育つ時代になっ



都市を流れる桃ノ木川

とされていった。気が付いたらどぶ川になって魚なども住めない汚濁水路になり、汚いから川に入ってはけないと親から言われて子供が育つ時代になっ



【かたやま・みつあき】

前橋市上下出町。県環境アドバイザー幹事、具尾瀬保護専門委員、南橋の自然観察と環境を守る会長。

身近な水辺を大切に

河川工事なども進み、国民生活もある程度の余裕が出来てきた一九九七年に河川法が改正されて、川造りの目的に「治水」「利水」のほかに「河川環境」が加わった。河川を考えていくうえで、「素人」の住民の考えも取り入れられる余地が出てきたのだ。

身近な川を改めて見直すと、いろいろなものが見えてくる。採水による化学的な水質分析は、川の瞬間的な状態を数量的に知ることができる。しかし、直後に全く異なる水が流れてきてもこれを知ることが出来ない。一方、移動力の小さな底生動物の生息状況の調査では長期的なおおよその水の状態を知ることができる。これが「生物による水質判定法」だ。親水公園などを造る際には、ぜひトイレや水道をつくってほしい。多くの人たちが直接水に触れ、見守るところから人間生活にとって好ましい河川環境が生まれ、川はもっと身近な水辺として保たれていくのだから。

(片山 満秋)